

看護学概論

担当教員 柴田 恵子、上妻 尚子、新 裕紀子、古江 佳織、古堅 裕章

配当年次 1年

開講時期 第1学期

単位区分 選択

授業形態 講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

看護専門職としての自己の健康観、看護観を迫及するために必要となる知識、概念を理解する。看護の対象および看護の提供、歴史・制度および将来の専門職の展望に関する知識から基礎的な看護学について理解する。保健・医療・福祉専門職者として相応しい高い知識と優れた技術を身につける必要性を知る。

【授業の展開計画】

第1回目のオリエンテーション時に、詳細な授業計画および本教科の履修について説明を行う。

週	授 業 の 内 容
1	オリエンテーション、看護学概論とは（柴田）
2	医療安全と医療の質保証（古江）
3	人間の欲求と健康、健康のとらえ方（上妻）
4	国民の健康状態（上妻）
5	看護の対象の理解（上妻）
6	国際化と看護、グループワーク：国際化と医療職者（古江）
7	災害時における看護（古堅）
8	小テスト1、ナイチンゲールについて（柴田）
9	サービスとしての看護、看護サービス提供の場（新）
10	職業としての看護・看護職者の養成制度と就業状況（古堅）
11	看護職者の教育とキャリア開発（柴田）
12	看護における倫理（柴田）
13	看護の提供のしくみ：看護をめぐる制度と政策（柴田）
14	小テスト2、看護とはなにか（柴田）
15	グループワーク：医療職者における専門性、学習のまとめ（柴田）

【履修上の注意事項】

課題について考え、レポートを提出する。第1回目のオリエンテーション時に授業前・後の学習について説明をするので、具体的な学習方法を考え実践すること。課題レポートは授業前の事前学習であり、講義期間中の小テストはそれまでの学習の復習を兼ねた事後学習である。

【評価方法】

定期試験（筆記）：60%、学習態度・状況（小テスト、レポート提出、グループ活動の参加と発表）：40%

【テキスト】

『系統看護学講座 基礎看護学 [1]』茂野香おる 他（医学書院）

【参考文献】

随時、紹介する。

解剖生理学 I

担当教員 二科 安三

配当年次 1年

単位区分 選択

準備事項

備考

開講時期 第1学期

授業形態 講義

単位数 2

【授業のねらい】

人体各部の構造と機能を勉強する。本講義で中心となる臓器は消化器系、血液および循環器系、呼吸器系、泌尿器系であり、その周辺（たとえば神経系等）にも注意を払いつつ勉強する。適切な教科書を指定するので、その7割程度は理解して他人に解説できるようになること。

【授業の展開計画】

週	授	業	の	内	容
1	栄養の消化と吸収	消化器官の構造			二科
2		消化器官の構造			二科
3		消化器官の機能			二科
4		消化器官の機能			二科
5	呼吸と血液の働き	呼吸器の構造			二科
6		呼吸器の機能			二科
7		血液の成分			二科
8		血液の機能			二科
9		血液の機能			二科
10	血液の循環と調節	心臓の構造			二科
11		心臓の機能			二科
12		血液循環の調節			二科
13	体液の調節と尿の生成	腎臓の構造			二科
14		腎臓の機能			二科
15		体液の調整機構			二科

【履修上の注意事項】

教科書に準拠して講義を進めるので、授業前・後に教科書をよく読んで予習と復習をして下さい。

【評価方法】

期末試験(100%)で判定する。

【テキスト】

解剖生理学（人体の構造と機能[1]）、坂井建雄、岡田隆夫 医学書院

【参考文献】

なし。

解剖生理学Ⅱ

担当教員 二科 安三

配当年次 1年

開講時期 第2学期

単位区分 選択

授業形態 講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

人体各部の構造と機能を勉強する。本講義で中心となる臓器は自律神経系、内分泌系、骨と筋肉、生殖器官系、生体防御免疫系が中心となる。適切な教科書を指定するので、その7割程度は理解して他人に解説できるようになること。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容	
1	内臓機能の調節	自律神経の構造 二科
2		自律神経の機能 二科
3		自律神経の機能 二科
4		内分泌系の構造 二科
5		内分泌系の機能 二科
6		内分泌系の機能 二科
7	身体の支持と運動	骨と筋の構造 二科
8		骨と筋の機能 二科
9	情報の受容と処理	中枢神経の構造と機能 二科
10		中枢神経の構造と機能 二科
11		末梢神経の構造と機能 二科
12		特殊感覚の構造と機能 二科
13	外部環境への対応と防御	二科
14	生殖、発生および老化の仕組み	二科
15	生殖、発生および老化の仕組み	二科

【履修上の注意事項】

教科書に準拠して講義を進めるので、授業前・後に教科書をよく読んで予習と復習をして下さい。

【評価方法】

期末試験(100%)で判定する。

【テキスト】

解剖生理学Ⅰと同じ教科書を使用する。

解剖生理学 人体の構造と機能1、坂井建雄、岡田隆夫、医学書院

【参考文献】

なし。

生活栄養学

担当教員 本田 榮子

配当年次 1年

開講時期 第2学期

単位区分 選択

授業形態 講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

- 食物と健康という観点から、基礎栄養学、食物の消化・吸収、栄養素の特徴や役割、臨床栄養学の面から疾病と栄養の関連について理解し、自らが幅広い視野と知識を身につけ実践する事、特に食事や栄養に関する情報が急増している中、自身や人々の健康の維持増進に努めてもらう事が出来るようになってもらいたい。
 なお医療専門職として、様々な身体的状況にある人々に接する際に、自身が学んだ食事指導を効果的に行う技法や体験を活かし、サポートする事で自らも健康的な食生活が実践できるようになる。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	オリエンテーション 栄養の基本概念(栄養とは 健康と栄養評価 食と環境)
2	食生活の課題(食習慣と栄養・スポーツと栄養 栄養状態の評価と方法)
3	日本人の食事摂取基準(栄養素別基準・食品群別摂取量・摂取エネルギーの算定・活動代謝)
4	栄養指導・保健指導(栄養指導の過程と栄養スクリーニング、特定健診・特定保健指導とは)
5	栄養素の機能と代謝(1) 炭水化物の種類、エネルギー
6	栄養素の機能と代謝(2) 脂質・たんぱく質の種類、代謝、栄養
7	栄養素の機能と代謝(3) ビタミン・無機質の機能と代謝
8	食物の摂取と消化・吸収(食欲・消化の調節・栄養素の吸収)
9	ライフステージと栄養(妊娠・授乳期期・乳幼児期・)
10	ライフステージと栄養(学童期・思春期・)
11	ライフステージと栄養(成人期・老年期)
12	病態時の栄養(1) 栄養障害・疾患別食事指導の実際
13	病態時の栄養(2) 疾患別食事指導の実際
14	病態時の栄養(3) 疾患別食事指導の実際
15	病態時の栄養(4) 疾患別食事指導の実際(経管栄養と中心静脈栄養・NST)

【履修上の注意事項】

履修の中で、各単元の理解を把握するために演習課題を出すので、テキストと配付資料、テキストの副読本としての「栄養学整理ノート」をもとに、きちんと予習復習をし受講すること

【評価方法】

筆記試験85% 課題レポート10% 学習態度5%

【テキスト】

「わかりやすい栄養学 第4版 -臨床・地域で役立つ食生活指導の実際-」ヌーヴェルヒロカワ

【参考文献】

わかりやすい栄養学(三共出版) 基礎栄養学(第一出版) 日本人の食事摂取基準(2015年版) 七訂補日本食品成分表、国民衛生の動向29年版 糖尿病の食品交換表、腎臓病の食品交換表、応用栄養学(医歯薬出版)

感染症学

担当教員 樋口 マキエ、齋田 和孝、三森 龍之

配当年次 2年

開講時期 第1学期

単位区分 選択

授業形態 講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

① ヒトは通常、どのような微生物と共生しているのか？常在正常細菌叢とその働きについて、② 病気の原因となる微生物（病原微生物）の分類と特性（構造、性質、病原性）について、③ 感染の成立と生体防御機構、代表的感染症の起原菌と臨床症状、特殊な患者における感染症について、④ 医療における感染予防とその方法について学ぶ。⑤ 抗病原微生物薬（殺菌薬、抗菌薬、抗真菌薬、抗原虫薬、抗ウイルス薬等）の微生物に対する作用と人体への作用（副作用）を学び、感染症に対する化学療法を理解する。

【授業の展開計画】

【 授業内容 】

【 授業担当者 】 【 授業日程 】

(H30) 9:10-10:40

- | | | |
|---|---------------------|---------------|
| 1) 感染症学概論、自然免疫と常在正常細菌叢の働き | (三森) | 4/06 (金) |
| 2) 病原微生物の分類と特性（構造、性質、病原性、感染機構） | (三森) | 4/13 (金) |
| 3) 細菌と感染(特徴) | (三森) | 4/20 (金) |
| 4) 真菌と感染、原虫と感染 | (三森) | 5/11 (金) |
| 5) 病原微生物の分類と特性：ウイルスと感染、寄生虫 | (三森) | 5/18 (金) |
| 6) 感染症の診断における臨床検査（小テスト） | (三森) | 5/25 (金) |
| 7) 感染に対する生体防御機構、ワクチン接種 | (齋田) | 6/1 (金) |
| 8) 感染経路と感染症の症状（臨床像）、医療関連感染とその制御 | (齋田) | 6/8 (金) |
| 9) 特殊な患者における感染症（新生児、妊婦、高齢者、がん患者）
新興・再興感染症、 | (齋田) | 6/15 (金) |
| 10) 医療現場における感染防止対策（感染管理認定看護師：熊大附病 非常勤講師） | | 6/22 (金) |
| 11) 殺菌薬、化学療法について | (樋口) | 6/29 (金) |
| 12) 抗病原微生物薬の作用機序と使用の基本 | (樋口) | 7/06 (金) |
| 13) 抗菌薬（抗生物質） | (樋口) | 7/13 (金) |
| 14) 抗菌薬（合成抗菌薬）、抗結核薬、抗真菌薬 | (樋口) | 7/20 (金) |
| 15) 抗原虫薬、抗ウイルス薬、殺菌薬 | (樋口) | 7/27 (金) |
| 16) 単位修得試験 | (9:10～10:40: 90min) | (樋口) 8/03 (金) |

【履修上の注意事項】

- 1) 授業時には、指定の教科書とノートを持ってくる。講義内容の要点を書留め、その日の内に整理復習する。
- 2) 講義プリントはファイルし、専門用語は正確に覚え、その概念を正しく理解する。
- 3) 教科書2冊を精読し自己学習する。①「わかる身につく病原体・感染・免疫」（主に4/06～6/15に使用）、②「コメディカルのための薬理学 第3版」-第12章 感染症に対する薬物と消毒薬-（6/22～8/03）
- 4) 教科書・参考書・プリント等を読んでも理解できないときは、教員に質問する。

【評価方法】

- 1) 学期末の筆記試験（100%）は、授業時間に比例した配点で評価する。
講義1～6(40点)、7～9(20点)、10～15(40点)
- 2) 授授業への出席は最低要件であり、十分要件ではない。

【テキスト】

- 1) わかる身につく病原体・感染・免疫(藤本 編、目野・小島 著、南山堂 2,800円)、3) 教員作成プリント
- 2) コメディカルのための薬理学 第3版(渡辺 他 編、朝倉書店 3,900円)-薬理学、病態生理学Iでも使用-

【参考文献】

- 1) 微生物学(南嶋・吉田・永淵 著、医学書院 2,200円)
- 2) 看護の基礎固め： 6. 微生物学編、4. 薬理学編(メデイカルレビュー社 各1,600円)

薬理学

担当教員 樋口 マキエ

配当年次 3年

開講時期 第2学期

単位区分 選択

授業形態 講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

薬物とは、生体の恒常性（ホメオスタシス）の破綻による生体機能の異常（病態）を正常範囲に戻そうとする目的で使用される化学物質である。疾病の予防、診断および治療に用いられる。日進月歩の薬物療法が、医療・看護の現場で適正に行われているか判断できるよう、各種の薬物を系統的に把握し理解する。基本的な薬理学の知識と論理的思考を学習し、副作用の発現防止に寄与する。

【授業の展開計画】

【授業内容】

原因療法薬（化学療法薬：抗病原微生物薬と抗がん薬）については、感染症学と病態生理学Ⅰで教授した。ここでは、対症療法薬について教授する。正常な人体の構造と機能および病態を復習しながら、人体に対する薬物の有益な作用と副作用およびその機序を、系統的に教授する。さらに、薬物の生体内運命を理解させ、対症療法薬の臨床応用および適用方法を把握させる。

【授業日程】

薬理学総論

平成28-29年16:30-18:00(月)

1. 薬とは、治験、薬と法令
生体の情報伝達系（生体の信号と応答、情報伝達物質、受容体）、作用薬と拮抗薬 9/26 (月)
2. 生体に対する薬物の働きかけ：薬理作用、用量-反応関係 10/03 (月)
3. 薬物に対する生体の働きかけ：生体内の薬の動きと反応に影響を与える因子 10/11 (火)
4. エイジングと薬 10/17 (月)

生体の機能異常（病態）と薬

5. 末梢神経系作用薬：自律神経作用薬（アドレナリン作働薬・遮断薬） 10/31 (月)
 6. 末梢神経系作用薬：自律神経作用薬（コリン作働薬・遮断薬） 11/02 (水)
 7. 末梢神経系作用薬：運動神経作用薬（筋弛緩薬）、感覚神経作用薬（局所麻酔薬） 11/07 (月)
 8. 代謝・内分泌系作用薬：糖尿病治療薬、消化系作用薬：潰瘍治療薬 11/14 (月)
 9. 免疫系作用薬：抗アレルギー薬、解熱鎮痛薬（NSAIDs）、ステロイド性抗炎症薬 11/21 (月)
 10. 循環系作用薬：抗高血圧薬、利尿薬 11/28 (月)
 11. 循環系作用薬：虚血性心疾患治療薬、抗血栓薬、抗不整脈薬 12/05 (月)
 12. 循環系作用薬：心不全治療 12/12 (月)
 13. 中枢神経系作用薬：全身麻酔薬、麻薬性鎮痛薬 12/19 (月)
 14. 中枢神経系作用薬：睡眠薬、抗不安薬、抗うつ薬、 1/16 (月)
 15. 中枢神経系作用薬：抗精神病薬、抗パーキンソン病薬、抗てんかん薬 1/23 (月)
16. 単位修得試験 1/30 (月)

【履修上の注意事項】

- 1) ノートを各自用意し講義内容の要点を記す。その日の内に教科書を読み込み内容を整理・復習する。
- 2) 講義プリントはファイルし、薬理学授業時に、教科書、ノートと一緒に必ず持ってくる。
- 3) 専門用語は正確に覚え、その概念を正しく理解する。理解できないときは、質問する。
- 4) 授業参加は最低要件であり十分要件ではない。

【評価方法】

- 1) 学期末の本試験（100%：筆記試験）で評価する。前提条件は2/3以上の出席。
- 2) 「薬物療法の基礎知識を用い、論理的思考を展開できる」を評価基準とする。

【テキスト】

- 1) コメディカルのための薬理学 第2版（渡邊、樋口/編、朝倉書店 3,900円）
- 2) 教員作成プリント

【参考文献】

- 1) 看護の基礎固め ひとり勝ち薬理学（自律神経系） 片野/編 メディカルレビュー社 1,600円
- 2) 薬理学 第13版 吉岡、泉、伊関著、医学書院 2,300円
- 3) 『今日の治療薬2016』 浦部、島田、川合編、南江堂

健康相談論

担当教員 古賀 由紀子

配当年次 2年

単位区分 選択

準備事項

備考

開講時期 第2学期

授業形態 講義

単位数 2

【授業のねらい】

児童生徒の心の健康問題が深刻化し、保健室でも心身両面の対応が養護教諭の重要な職務として位置づけられていることを理解する。また養護教諭の専門性や保健室の機能を生かした相談活動としての「健康相談」についての理論と方法について理解し、具体的に子どもの状態のとらえ方と対応について説明できる。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	児童生徒の心身の健康問題の現状と背景/健康相談の基本的理解
2	養護教諭の職務の特質及び保健室の機能と健康相談
3	健康相談と健康相談活動（学校保健安全法との関連）
4	健康相談に関連する諸理論
5	健康相談のプロセス
6	ヘルスアセスメントについて
7	健康相談における子ども理解の方法（演習含む）
8	健康相談における心理的理解
9	健康相談における連携
10	諸問題の捉え方とかかわり方
11	諸問題への具体的な対応について（事例研究の目的）
12	事例から相談支援を具体的に学ぶ① 疾病を伴う事例
13	事例から相談支援を具体的に学ぶ② 非社会的行動、反社会的行動、生活上の課題を持つ事例
14	保健室登校と不登校の捉え方と対応
15	健康相談における記録、力量形成・研究・研修

【履修上の注意事項】

授業の最後に次の授業内容を予告するので、その内容について調べておくこと。
授業の最後に振り返りのための課題を提示するので、それを踏まえて振り返りまとめておく。次の授業の最初に前回のまとめを提出する。

【評価方法】

レポート30%、まとめのテスト70%として評価する

【テキスト】

養護教諭の行なう健康相談 大谷尚子、森田光子編 東山書房

【参考文献】

病態生理学 I

担当教員 掃本 誠治、大河原 進

配当年次 3年

開講時期 第2学期

単位区分 選択

授業形態 講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

病態生理学は、疾病を正常機能の破綻や調節機能の異常の観点から原因解明し、病理学は、疾病の原因、機序、診断を明らかにする学問である。病態生理学 I では、解剖生理学と生理学で学んだ人体の正常な仕組みをきちんと理解していることを前提として、疾病の成り立ちを基本的な機序によって整理し、その結果引き起こされる組織や臓器の変化における正しい知識を身につけ、各種疾患における病態生理や臨床症状を理解するための基礎を総論的に学ぶ。専門用語を正しく理解し、臓器ごとの各種疾患の成り立ちを理解するための基礎を身につける。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	病理学入門 病因論 (1) 病理学で学ぶこと (大河原)
2	病理学入門 病因論 (2) 障害と修復 (大河原)
3	腫瘍 (1) 腫瘍の定義と分類、発生原因 (掃本)
4	腫瘍 (2) 腫瘍の発生病理、転移と進行度 (掃本)
5	腫瘍 (3) 腫瘍の診断と治療 (掃本)
6	腫瘍 (4) 腫瘍の診断と治療 (化学療法) (掃本)
7	循環障害 局所性・全身性の循環障害 (掃本)
8	代謝障害 (掃本)
9	小テスト 前半まとめ (掃本)
10	感染症 (掃本)
11	老化と死 (掃本)
12	炎症と免疫 (1) 炎症、免疫 (掃本)
13	炎症と免疫 (2) 免疫・アレルギーと自己免疫疾患、膠原病 (掃本)
14	先天異常 (1) 先天異常、遺伝子異常、遺伝性疾患 (掃本)
15	先天異常 (2) 染色体異常、胎児の障害、診断 (掃本)

【履修上の注意事項】

多くの専門用語が出てくるので、必ず教科書を予習してくること。復習も必ず行うこと。

【評価方法】

授業への積極性 (5%)、筆記試験 (95%) で総合的に評価する。60点以上を合格とする。

【テキスト】

(系統看護学講座、専門基礎分野) 疾病の成り立ちと回復の促進 [1] 「病理学」、大橋健一ほか編、医学書院

【参考文献】

1. 新クイックマスター「病理学」、堤寛監修、医学芸術社
2. 図解ワンポイントシリーズ3、「病理学 疾病のなりたちと回復の促進」、岡田英吉、医学芸術社

環境衛生学

担当教員 星野 輝彦

配当年次 2年

単位区分 選択

準備事項

備考

開講時期 第2学期

授業形態 講義

単位数 2

【授業のねらい】

環境因子と人との相互関係を理解し、生活環境の安全の確保と健康の維持・増進の重要性を認識できる。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	環境衛生学概論：環境衛生の歴史
2	環境因子と人体：環境物質の体内動態と毒性、安全の基準
3	環境化学：生態系と物質動態
4	地球環境の化学：オゾン層破壊、地球温暖化、酸性雨
5	環境因子と健康：化学的因子（重金属、農薬、工業薬品など）の健康への影響
6	環境因子と健康：化学的因子（環境ホルモンなど）の健康への影響
7	環境因子と健康：生物学的因子（病原微生物など）の健康への影響
8	環境因子と健康：物理的因子（放射線など）の健康への影響
9	環境因子と健康：物理的因子（温熱、圧力、騒音など）健康への影響
10	大気環境と健康：大気汚染の状況と対策
11	水環境と健康：水に由来する健康被害、水質汚濁状況と対策
12	食品環境と健康：食品汚染と食中毒
13	生活環境と健康：室内の汚染物質
14	生活環境と健康：廃棄物の分類と処理方法
15	環境影響評価と対策：環境アセスメント

【履修上の注意事項】

講義予定の項目を予習すること。受講後、復習しておくこと。
出欠は出席カードを用います。出席カードの裏に講義の感想を書くこと。

【評価方法】

試験90%、レポート10%

【テキスト】

各講義の際に資料を配布する。

【参考文献】

「環境衛生の科学」篠田純男、那須正夫、黒木広明、三好伸一（三共出版）
「環境衛生科学」大沢基保、内海英雄（南江堂）

公衆衛生学

担当教員 嶋 政弘

配当年次 2年

単位区分 選択

準備事項

備考

開講時期 第1学期

授業形態 講義

単位数 2

【授業のねらい】

- 1 現代における健康課題を理解するために、その基礎となる知識と技能を習得する。
- 2 私たちを取り巻く自然・社会環境や人々の活動を理解し、心身ともに健康で豊かなQOLの向上を目指すことができる。

【授業の展開計画】

授業の概要

現代の生活様式や環境に起因する様々な健康課題に関心を持ち、それに対し、私たちはどのようにかかわっていくかというテーマで構成する。

そのために、ペアを中心としたディスカッションを随所に仕組み、根拠を示しながら自分なりの考えを述べることを目指す。

授業計画

第1回：健康の定義と位置づけ

第2回：健康の要因と公衆衛生の特徴

第3回：公衆衛生の歴史（公衆衛生の発展に寄与した人物を基に）

第4回：予防医学とヘルスプロモーション

第5回：健康な社会を目指して① 健康の測定と健康指標

第6回：健康な社会を目指して② 人口に関する現状と課題を中心に

第7回：健康な社会を目指して③ 新生児～学童期の生命（母子保健を含む）

第8回：集団の傾向の把握① 疫学的考えに基づく解析

第9回：集団の傾向の把握② 実態把握の方法とバイアス

第10回：集団の傾向の把握③ データの種類と解釈

第11回：感染症とその予防① 感染症成立の条件と発症までの経緯

第12回：感染症とその予防② 感染症に関する現状と傾向（予防と根絶を含む）

第13回：食品保健と栄養① 食品の安全（食中毒）と現状

第14回：食品保健と栄養② 食品の機能と安全性

第15回：生活習慣病 主な生活習慣病の原因と健康影響（予防と対策を含む）

【履修上の注意事項】

- 1 ペアによるディスカッションをするため、ペアを作って着席する。
- 2 すべてのペアに発言の機会があるので、常に自分の考えを持って参加する。

【評価方法】

ディスカッションへの参加40%、課題提出20%、期末試験40%で評価する。
追試験は実施しない。

【テキスト】

使用しない。

【参考文献】

毎回、資料（学習プリント）を配布する。参考資料については、授業の中で随時提示する。

精神保健 I

担当教員 茶屋道 拓哉

配当年次 2年

単位区分 選択

準備事項

備考

開講時期 第1学期

授業形態 講義

単位数 2

【授業のねらい】

- 1 精神の健康についての基本的考え方と精神保健学の役割について説明できるようになる。
- 2 精神保健を維持・増進するために機能している専門機関や関係職種の役割と連携について基礎的知識を備える。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	精神保健の概要
2	精神保健の歴史と現代における意義・課題
3	社会構造の変化と新しい健康観
4	ライフサイクルと精神の健康（出生前～思春期）
5	ライフサイクルと精神の健康（青年期～老年期）
6	ストレスと精神の健康
7	生活習慣と精神の健康
8	精神の健康、精神疾患、身体疾患に由来する障害
9	アルコール関連問題と精神保健
10	うつ病と自殺防止対策
11	現代社会を取り巻く諸相と精神保健（長寿・認知症・少子化を巡って）
12	精神の健康に関する心的態度
13	精神保健に関する予防の概念と対象
14	精神保健に関する国、都道府県、市町村、団体などの役割と連携
15	精神保健に関する専門職種

【履修上の注意事項】

- 1 必ず講義ノートを作成すること。また、配布するプリントをファイル化し毎回持参することが必要である（配布資料は何回か使用する可能性がある）。
- 2 授業前にテキストの該当部分を一読しておくこと。
- 3 授業後に配布された資料や講義ノート・テキスト等を用い振り返りを行いながら理解を深めること。

【評価方法】

- 1 試験による評価（70%）
- 2 授業中のレスポンスやミニレポート（30%）

【テキスト】

新・精神保健福祉士養成講座『精神保健の課題と支援（第3版）』中央法規，2018年

【参考文献】

『精神保健医療福祉白書2017年版』精神保健医療福祉白書編集委員会編，中央法規

学校保健

担当教員 古賀 由紀子

配当年次 2年

単位区分 要件外

準備事項

備考

開講時期 第1学期

授業形態 講義

単位数 2

【授業のねらい】

児童生徒の発育・発達、健康、そして学校教育法につながる指導要領等の教育の基礎を把握するとともに、児童生徒の実態から保健教育、保健管理、組織活動の諸活動を理解し、これら学校保健活動の計画と組織を教育計画と学校組織との関連でとらえ、教育の中の学校保健の全貌を説明できる。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	学校保健概論・・・学校保健と関連法、学校保健の目的、学校保健の構造
2	学校保健概論・・・学校保健の歴史、社会情勢との関連
3	学校保健計画・・・学校教育目標との関連、保健室経営との関連
4	学校保健組織活動・・・学校保健関係者と各々の職務、学校保健組織と運営、関連組織
5	学校保健の対象・・・児童生徒の発育発達の現状と課題
6	学校保健の対象・・・健康の基礎理論
7	学校保健の対象・・・心の健康問題、精神保健
8	学校保健活動・・・保健管理：領域側面、意義、方法
9	学校保健活動・・・保健管理：健康観察、健康相談
10	学校保健活動・・・保健管理：健康診断、保健調査
11	学校保健活動・・・保健管理：学校環境衛生
12	学校保健活動・・・保健管理：感染症予防
13	学校保健活動・・・安全管理：学校安全と危機管理、救急処置
14	学校保健活動・・・保健教育：学校における保健教育の考え方、保健学習と保健指導
15	学校保健活動・・・性教育、薬物乱用防止教育、食育

【履修上の注意事項】

授業の最後に次の授業内容を予告するので、その内容について調べておくこと。毎時間の講義課題を明確にして、出席すること。

授業の最後に振り返りのための課題を提示するので、それを踏まえて振り返りまとめておく。次の授業の最初に前回のまとめを提出する。

【評価方法】

レポート10%、試験90%で評価する

【テキスト】

学校保健ハンドブック 第5次改定 教員養成系大学保健協議会 ぎょうせい
新訂版 学校保健実務必携 第一法規

【参考文献】

養護概説

担当教員 古賀 由紀子

配当年次 2年

単位区分 要件外

準備事項

備考

開講時期 第2学期

授業形態 講義

単位数 2

【授業のねらい】

養護教諭の職務である保健教育、保健管理、救急看護、学校保健経営の4機能を理論的に理解し、具体的な職務内容と方法論で実証し、学校経営の中で、そして学校保健の各領域で養護教諭の職務がどう機能するかを把握し説明できる。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	養護の概念
2	養護教諭制度と歴史
3	養護教諭の専門性、養護教諭の倫理
4	養護教諭の活動拠点保健室—その役割と機能
5	養護教諭の活動拠点保健室—保健室経営計画
6	養護活動の過程
7	養護教諭の実践—1 健康実態・健康問題の把握（健康観察、保健調査）
8	養護教諭の実践—2 健康実態・健康問題の把握（健康診断）
9	養護教諭の実践—3 支援の方法（救急処置活動）
10	養護教諭の実践—4 支援の方法（健康相談）
11	養護教諭の実践—5 養護活動の展開
12	養護教諭の実践—6 環境整備（感染症予防、学校環境衛生）
13	養護教諭の実践—7 健康教育活動（保健指導、保健学習、保健便り）
14	養護教諭の実践—8 組織活動
15	養護教諭と研究

【履修上の注意事項】

授業の最後に次の授業に向けた課題を出すので、それについて調べておくこと。
各回の授業では振り返りを行い、それを授業後にまとめること。

【評価方法】

レポート15%、筆記試験85%として評価

【テキスト】

- ・養護学概論 編者 岡田加奈子、河田史宝 東山書房
- ・「新訂版学校保健実務必携」 学校保健・安全実務研究会 第一法規

【参考文献】

冊子「学校保健」松本敬子編、 「養護教諭の授業づくり」 松本敬子他 東山書房

養護実践論

担当教員 古賀 由紀子

配当年次 3年

開講時期 第1学期

単位区分 要件外

授業形態 講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

これまでの養護専門科目学習の総まとめを行うとともに、養護教諭としての実践力を身につける。学校で養護実践を行う場合に必要となる計画、実施、評価、改善の各過程をいくつかの職務を例に取り上げ、具体的に述べる事ができる。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	学校経営の中の保健室経営
2	保健室経営の考え方と進め方、保健室経営計画の立案
3	保健室経営の実際、保健室経営の評価
4	養護活動の実際①（健康診断の計画）
5	養護活動の実際②（健康診断の実施）
6	養護活動の実際③（健康診断の評価・改善）
7	養護活動の実際④（学校救急処置活動の計画）
8	養護活動の実際⑤（学校救急処置活動—子供に起こりやすい疾病）
9	養護活動の実際⑥（学校救急処置活動—内科的対応-心因性含む）
10	健康教育の実際① <保健学習と保健指導について>
11	健康教育の実際② <指導案の作成>
12	健康教育の実際③ <模擬授業の実施>
13	学校保健組織活動①（学校保健委員会の計画）
14	学校保健組織活動②（学校保健委員会の実施）
15	学校保健組織活動③（学校保健委員会の評価・改善）

【履修上の注意事項】

毎回次の学習への予習課題を提示するので、調べておくこと。毎回の授業終了後振り返りのための課題を提示するのでまとめておくこと。

【評価方法】

事前学習30%・レポート40%・プレゼン30%

【テキスト】

適宜プリントを配布する

【参考文献】

「つながる・ひろがる 学校保健」 東山書房 松本敬子他著

看護学各論

担当教員 吉岡 久美

配当年次 3年

単位区分 要件外

準備事項

備考

開講時期 第1学期

授業形態 講義

単位数 2

【授業のねらい】

さまざまな疾患や症状の理解を深め、それぞれにおける看護の視点や方法について学習することを目的とする。また、養護教諭の職務の一領域である学校看護に必要な看護学を学ぶ。学校看護は、児童・生徒の生命を守り、健康の維持・増進をはかることを目的とし、また重要な教育活動である意義を理解する。心身のメカニズム、疾病・異常等、臨床看護実習にも必要な知識・技術を修得すると共に、これらを学校看護の教育としての独自性の中に生かすことを学ぶ。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	看護の基礎と看護行為の基本、疾病の経過や治療処置に伴う看護の理解を深める
2	循環器系疾患の発生機序、病態をもとに、疾患による看護を理解する
3	呼吸器系疾患の発生機序、病態をもとに、疾患による看護を理解する
4	消化器系疾患の発生機序、病態をもとに、疾患による看護を理解する
5	造血器系疾患 内分泌・代謝系疾患の発生機序、病態をもとに、疾患による看護を理解する
6	泌尿器・生殖器系疾患の発生機序、病態をもとに、疾患による看護を理解する
7	運動器系疾患の発生機序、病態をもとに、疾患による看護を理解する
8	脳神経系疾患、精神系疾患の発生機序とその看護を理解する
9	感覚器系疾患に関する病態とその看護を理解する
10	救命救急看護を理解する
11	発熱・腹痛・頭痛・嘔気嘔吐・呼吸困難・けいれんなどの症状別看護を理解する
12	小児看護と母性看護を理解する
13	思春期看護、障がいのある方への看護を理解する
14	老年、精神看護を理解する（在宅を含む）
15	ターミナルケアからグリーフケアまでの重要性を理解する

【履修上の注意事項】

事前学習として、それぞれの単元で扱う項目に関する事柄を、テキストから拾い上げておき、講義に臨むこと。事後学習では、講義終了後にノートをまとめなおし、関連する疾患や状態像と合わせて理解を深めること。

【評価方法】

課題の提出等 20%
筆記試験（小テストを含む） 80%

【テキスト】

養護教諭のための看護学 改訂版 藤井寿美子他 大修館書店

【参考文献】

基礎看護技術

担当教員 吉岡 久美、柴田 恵子、古江 佳織、新 裕紀子

配当年次 3年

開講時期 第2学期

単位区分 要件外

授業形態 演習

単位数 4

準備事項

備考

【授業のねらい】

1. 児童・生徒が健康に生活をするための援助法の一つとして、基礎看護技術を学ぶ。
2. 看護の基礎技術を学習し習得することで、援助過程での活用の意義を理解する。

【授業の展開計画】

- ・ 第1回講義時に担当者等の詳細を説明する
- ・ 本教科は講義と演習で学習を進めるため、項目が前後することもありうる

週	授 業 の 内 容
1	病床環境調整の必要性とその方法について学習し実践する。
2	生命の兆候を観察する技術を知り、バイタルサインの示す意味と測定方法を習得する。
3	安全を守る技術を習得し、安楽な体位を理解して移動等の支援の実践方法を習得する。
4	運動と休息が身体に及ぼす影響を理解し、体位とバイタルサイン、運動の援助方法を習得する。
5	栄養管理を含めた食事の重要性を理解し、形態、摂取方法について理解する。
6	排泄の意義・目的を理解し、その管理方法と援助について実践する。
7	身体の清潔の目的を理解して、衣服管理・交換方法を含めた援助を実践する。
8	身体の清潔の目的を理解して、身体保清の具体的方法を習得する。
9	身体状況に応じた褥法の適応を理解して実践し、安楽かつ快適さを確保する技術を習得する。
10	検査・治療を安全かつ正確に行う技術を理解し、対象者の理解と看護の役割を知る。
11	感染の危険性を再確認し、その具体的予防としての管理方法、清潔操作、創傷管理等を実践する。
12	与薬についての知識を深め、薬剤の管理と投与方法を理解する。
13	安楽な呼吸のための吸引、吸入の目的と種類を理解し、手技と管理方法を習得する。
14	救急救命処置の技術を理解し、緊急時の判断ができる能力を習得する。
15	危篤・終末時の意味を知り、心理・生理的变化を踏まえて死を迎える時の援助を習得する。

【履修上の注意事項】

- ・ 演習は動きやすい服装（ジャージ等）と靴を準備すること
- ・ 準備物等は掲示板にて連絡するため、確認しておくこと
- ・ 講義及び演習の構成上、展開計画の流れが変更となることがあるが、事前に掲示するため注意し、十分に事前学習をしてレポート作成すること
- ・ 事後学習では、関連する疾患や状態像と合わせて理解を深め、課題に取り組むこと。

【評価方法】

筆記試験 70% 学習への取り組み、課題の提出 30%

【テキスト】

基礎看護技術 （メディカ出版）

【参考文献】

養護教諭講座3 新版 基礎看護学（東山書房）

臨床看護実習

担当教員 吉岡 久美、古賀 由紀子

配当年次 3年

開講時期 第2学期

単位区分 要件外

授業形態 実習

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

看護学・基礎看護技術で学習した知識・技術を基に病院臨床の場でさらに観察し、またこれを実際に行ってみることにより、看護の理解を深める。
学校保健活動および養護教諭の職務、養護実習との関連を考え、臨床看護実習の意義を理解する。

【授業の展開計画】

1. 病院施設、機構、環境、設備を理解する。
病院における検査機器、医薬品の取り扱い
2. 疾病理解とその対応
様々な疾病について知り、それぞれの疾病に応じた対応を理解する
3. 対象を理解し、適切なコミュニケーションをはかる
患者理解とその対応、医療従事者への連絡・報告
4. 看護業務を観察し、可能なことを実施してみる（指導者監督下）
 - ①観察と測定
情報収集
バイタルサインのチェック
 - ②環境設備
施設、環境、設備の理解と整備
ベットメイキング
 - ③日常生活の援助
体位変換、病衣・シーツ交換、全身清拭、洗髪、入浴等介助、口腔の清潔、食事介助、経管栄養摂取、排泄介助
 - ④処置
診察介助、与薬、咽頭前吸引、導尿、包帯法
 - ⑤清潔操作
滅菌器具及び物品の取り扱い

【履修上の注意事項】

- ・実習事前指導に出席すること。
- ・事前学習として、これまで学んだ解剖整理、病態、医学一般、看護学各論、基礎看護技術、薬理学等を中心に復習しておくこと。
- ・事後学習では、報告会での他実習先での学びを振り返り、体験できなかった技術や対応について、その方法・留意点をまとめること。

【評価方法】

実習成績(90%)

実習出席状況、実習態度、看護実習レポート 看護カンファレンスへの参画、学内実習態度（発表内容等）(10%)

【テキスト】

実習要項、実習資料

【参考文献】

『基礎看護技術』 メディカ出版